

北京中央美術学院収蔵の 矢崎千代二の新出作品をめぐる考察 —基準作の呈示と様式変遷の検討—

京都府文化芸術振興課
横田香世

日本近代洋画のパステル画を牽引した矢崎千代二（1872～1947）は、大幸館卒業後、東京美術学校で黒田清輝に学んだ。32歳より世界各地を歴遊し、旅で出会う瞬間の風景を描きとめるため、パステルによる「色の速写」という手法を唱えた。終戦を北京で迎え、2年後に75歳で客死。戦中戦後の混乱期の北京でもパステル画を広め、徐悲鴻と交流し、北京中央美術学院開学の教員に名を連ねる唯一の日本人である。矢崎の活動範囲は多国にわたり、作品も散逸し系統立てた追跡が難しかったが、同学院に1008点の作品が遺されていることが明らかになり、現地調査から新出の作品と資料の存在が確認された。本発表では、1008点の制作年の特定を軸に、矢崎のパステル画の表現方法の変遷を論じ、また、明らかになっていなかったパステル製造についても新知見を加える。

新出作品は合計25の木箱に収められ、1箱が人物画、24箱は風景画で、欧州、中国、印度、南洋諸島、南米、南阿など概ね写生地ごとに分けられ、サイズは全て4号であった。自著『パステル画の描き方』に掲載の10作品を含み、矢崎が終生持ち歩いていた作品と考えられる。裏面には題記があり、その向きと筆致から矢崎の口述を弟子が書き入れたと推察される。学院長の徐悲鴻により講師に招聘された際、矢崎の意思により目録と一緒に寄贈された可能性が高い。制作時期は、矢崎がパステル画に転向した頃とされる1916年（44歳）から1940年（68歳）で、これまで知られていた作品にあらたに複数の基準作を加えることができた。

矢崎のパステル画は岡田三郎助に「其の瞬間の写生」と評され、スナップショットのような臨場感のある表現には形は正しくなくても生きている方がよいと、矢崎自身もその場での速写を強調した。1922年のパリ遊学の時期からその傾向が強まり、さらに1930年からの南米移民を取材した開拓の情景には、貪欲に歩き回り、生命感に満ちた画面を構築していく矢崎の感情の動きが一層強く感じられる。年代を追って使用する紙の色や彩色の手順、ストロークにも速写のための工夫が積み重なっていくことを見出すことができた。しかし、矢崎が求めていたことはそれだけではなかった。風景画にも静的、動的の2種があるとし、速写の一方で、対象物を忠実に精密な観察で、これ以上描きようがないまでに仕上げることを勧めている。新出作品の中で、承徳行宮寺を描いた作品4点はパステルの技を駆使した晩年の静的な風景画の基準作といえよう。本画として油絵に匹敵するパステル画の確立を目指したのではないかと考える。

また、矢崎は1916年から10年間帰国しなかったとされてきたが、制作年代と写生地の特定により、1919年帰国の事実が判明した。その年は矢崎が生産を依頼した国産パステル工場の創業年であり、彼の活動と整合する。

以上、今回発見した1008点の分析を通して、矢崎のパステル表現の様式展開と活動をより具体的に論じることが、本発表の目的である。